

第17回ふじのみや子どもの本のセミナー 2023

子どもと本をつなぐー絵本から児童文学へ（全6回）

講師 伊藤 明美さん（元浦安市立中央図書館司書）



第17回ふじのみや子どもの本のセミナーは、伊藤明美さん（元浦安市立中央図書館司書）を講師にお迎えして、子どもにどんな本を紹介するか、グループワークを交えて考えました。

（以下、6回の講座の要約）

【9月25日午前の部】

絵本を読み合うワークショップ

子どもに絵本を読むときどんな絵本を選んだらよいか、同じテーマをあつかった2冊の絵本を読み比べて考えるワークショップをおこなった。それぞれの絵本を、耳で聞いて、絵を見てわかるかどうかを比較し、発表した。



Aグループ

①『ブルンミのたんじょうび』

・暖かみのある色、センスがよくずっと見ていたい絵 ・ワクワク感があり、誕生日をおいおいする気持ちがもてる ・繰り返しが整っていて聞きやすい。嫌味がなく素直で暖かい気持ちになる

②『かんたくんにはひみつだよ』

・アニメのような絵 ・仲間はずれ、仕返し、おしおき、うそをつく等の表現がある ・文章が多く会話文でつながっていてわかりにくい

Bグループ

①『ピーターのでがみ』

・絵を見ただけでストーリーがわかる ・起承転結がはっきりしている ・結末に満足できる ・読者に対して誠実な表現で書かれている

②『ねずみくんとおてがみ』

・LINE のスタンプのような絵 ・結末がわからない。話の内容が伝わらない ・肩すかしをくらったような感じ

Cグループ

①『ふわふわくんとアルフレッド』

・絵に暖かみを感じる ・絵と文があっている ・主人公が自分で運命を切り開いていくところが良かった ・何度読んでもいい

②『すてられたお人形』

・絵の色調が暗い ・絵を見ただけでストーリーがわからない ・絵と文章があっていない ・こわい、悲しい、苦しい気持ちになる ・主人公に共感できない



Dグループ

①『ラチとらいおん』

・絵だけでストーリーがわかる

【講師紹介】1982年より33年間、浦安市立中央図書館にて司書として勤務。現在、社会福祉法人芳雄会図書館顧問・司書。千葉大、日本女子大、白百合女子大、清家女子大、山梨英和大非常勤講師、小澤尚ばなし大学語学講師、筑波大学院図書館情報メディア研究科博士後期課程在学中。

・具体的な出来事でストーリーが進むのでわかりやすい ・ラチが自分で弱さを克服していくところがよい

②『にこちゃんのママのて』

・絵が抽象的、背景がわかりにくい ・ママの手が重要なのに手だけ描かれているその手が太根やへちまにみえる ・自分で自分をほめたりして悲しい ・大人からみてよい子が描かれている

Eグループ

①『かもさんおとおり』

・遠目がきいて見やすい ・絵だけでストーリーがわかる。背景もたのしめる ・お母さんカモの姿が頼もしい

②『カルガモさんのお通りだ』

・『かもさんおとおり』を真似しているような色 ・遠くからみて絵が見にくい ・カルガモを題材にして子どもを教育しようとしている

Fグループ

①『マイクマリガンとスチームショベル』

・絵に動きがある ・絵と文が合っている ・絵もストーリーもわかりやすくバランスがととてもよい

②『ブルドーザーのガンバ』

・絵は写実的なのにわかりにくい ・絵だけでストーリーがわからない ・悲しい絵、暗い気持ちになる、説明が多すぎる ・主人公のガンバはがんばっているのに報われないストーリー展開

【講師より】

②の本の感想で共通したところは、さみしい、暗い、絵を見ていくだけおはなしがわからない。子どもは絵を見て耳から聞いたおはなしを楽しむが、絵を見てわからないものは、非常にわかりにくい。

『ブルンミのたんじょうび』は、おはなしの最初のところは、ちょっと冷たくされてさみしく思うが、実はそうではなかったとわかり、最後ほっとして終わる。ああ、やっぱり誕生日はうれしいという気持ちで終わる。

『ピーターのでがみ』は一緒に誕生日を祝ってくれる友達がいる。具体的におはなしが進んでいき最後は満足できる。ストーリーにも必然性がある。



『ラチとらいおん』は、ラチはらいおんの力はあったが自分で成長していった。だからこれから先やっていると自己肯定感を高められた。

『マイクマリガンとスチームショベル』は男の子の視点からみんなでがんばれとスチームショベルを応援し、将来を保障してくれるところまでを描いている。物語の最後は子どもたちが満足できることが大切である。子どもたちは自分が



しあわせになりたいから本の主人公にしあわせになってほしいと思っている。結末がどうなったかわからないというのは、不安のまま終わるので、本を読むのはやめようという気持ちにさせる。

世の中には②のような本がたくさん売られていて、大人が買って与えるという場合もある。本の質をしっかりと見極めた視点で本を選んでほしい。

(記録・時田典子)

【9月25日午後の部】

ミニブックトーク (絵本を中心に)

絵本を選ぶ

どの絵本を選ぶかは大人の責任である。本は心の栄養と言える。よいものを読んでいくうちにじわじわとその子の人生を支える根っことなる想像力を育てる。優れた本は本当の読書の楽しみにつながる。絵本なら絵がストーリーを語っているか。ストーリーに必然性があり、子どもが満足する結末があるか。ことばや表現は耳で聞いてわかりやすいか。これらの点で判断したい。

読んでほしい絵本は読まれているか

子どもは色々なお話を聞いたり、読んでもらう、その経験の中で、本がおもしろいとわかる。ゆえに、読み聞かせは読書の入口となる。子どもの生活はいたるところに興味につながるきっかけがあふれている。一冊の本の中にもたくさんの切り口があることを意識して本の世界を子どもに紹介したい。

本を紹介する技術

本を紹介する方法として、口頭で本を紹介する「ブックトーク」。印刷物で紹介をする「ブックリスト」。本をならべて目から紹介する「展示」がある。

ブックトークは人が言葉で「生」で紹介するので、紹介者の生き生きとした強い関心・愛着の念を聞き手に印象付けることができ、読書への興味をかきたてる。

部分的に絵を示したり、読み聞かせたり、小さい実験を入れたり、実物を見せたり、本を知っているからこそできる意外なつながりを見つけ出し、広げていくことができる。子どもにとっては境があいまいなフィクションとノンフィクションをつなげてみるのもおもしろい組み合わせとなる。

自分で読めない年齢にはまるごと読み聞かせをしてほしい。紹介は正確に、うそは言わない。

インフォーマルなブックトーク

正式なブックトークではなく、読み聞かせの機会に気軽に、冊数は少なく、短時間でできる、インフォーマルなブックトークがある。例えば、20分間の読み聞かせの時間に、3冊読むか2冊読むか組み合わせプログラムをどうするか考えた時、ただ選ぶのではなく、ひとつのテーマを決めてやることで、その本の魅力が際立つ。

絵本中心のミニ・ブックトークの例



▶テーマ **まめ** 未就学児には、全て読み聞かせる。起承転結を考える。

『まめ』
『おまめ』
『ジャックと豆の木』
『あさですよ よるですよ』
『そらまめくんのベッド』
昔話「まめたろう」



▶テーマ **クモ** 未就学児～小学校低学年

『きらきらくものす みーつけた!』
『クモの巣図鑑』
『お姫さまくもに会う』(たくさんのふしぎシリーズ)
『くものすおやぶんとりものちょう』

▶テーマ **クモ** 小学校中学年～

『きらきらくものすみーつけた!』
『クモの巣図鑑』
『シャーロットのおくりもの』
昔話「アナシンと五」
昔話「クモのアナシン」



ミニ・ブックトークを進化させる

10分～15分なら1つのテーマを決め、それに関する本を集め、年齢・関心で選ぶ。焦点を絞りつつ発展させる。メインの本を決めておく。起承転結を考え構成する。

読み聞かせに+αとしてミニ・ブックトークを取り入れることで、読み聞かせがさらにおもしろくなる。子どもの興味のひっかかりはどこにあるかわからない。日頃からいろんな方向に目をむけ、情報を得て、ブックトークを進化させ続けてほしい。

(記録・大橋美佐子)

【10月23日午前の部】

幼年童話について

●幼年童話とは

- ①対象年齢は、年長組から小学校3年生くらいまで
- ②内容レベルは、対象年齢の子が自分で読んで理解できるものと、大人に読んでもらって理解できるものがある
- ③絵が多く、絵本と児童文学の橋渡しをするもの

この年齢の特徴、読書能力からすると、耳から聞く読書と自分で読む読書を並行している。読んであげれば長い物語を理解できるが、子どもが自分で自分に合ったものを探すのは難しい。

浦安市立図書館では、大きい子に気おくれせず手に取れるよう「やさしいものがたり」の棚を作り、小さい子と大きい子の両方の場所に置いたところ、利用されている。「ピーターラビット」シリーズは、絵本、小さい子、大きい子の各コーナーの3か所に置いている。どっちにも属している本もあるので複本で置いて手に取ってもらう。

参考資料：幼年童話に親しむころ 伊藤明美『母の友』2014.7月号

●幼年童話が読めないのは？

- ①幼年童話に出会うきっかけがない
- ②おもしろい幼年童話が少なく、出版点数が少ない
- ③年齢の問題 ・大人から見ると→また読んであげたい、自分で読めるようになってほしい ・子どもから見ると→また読んでほしい、自分で読みたい

●すすめたい幼年童話

『ももいろのきりん』『エルマーのぼうけん』『なんでもふたつさん』『カイサとおばあちゃん』『黒ネコジェニーのおはなし』シリーズ『ペチャンコスタンレー』『おっとあぶない』『火よう日のごちそうはひきがえる』『クマのプーさん』『たのしいり川べ』

●子どもの文学の重要点

『子どもと文学』（石井桃子・いぬいとみこ・鈴木普一・瀬田貞二・松居直・渡辺茂男/福音館書店）より

1. **素材とテーマ** 良い素材を取り上げて駄作になることもある。もののあわれや、悲惨さを語るのとは不適当。テーマやメッセージを前面に出すのはよくない。
2. **プロット** 『三びきのやぎのがらがらどん』は起伏のある事件の連続でまっすぐに進んでいる。必然性のある因果関係や心理的葛藤は子

どもには伝わらない。

3. **登場人物の描写** 説明調でなく行動や会話で表わしてほしい。
4. **会話の重要さ** 『こすずめのぼうけん』は会話ではっきり違いを出し、やっぱりおかあさんだとわかりほっとする。「おまえのおかあさんじゃないの」の言葉もよい。
5. **文体** 耳から聞いて分かりやすいか。

『幼い子の文学』（瀬田貞二著/中央公論社）で、瀬田貞二は“だめな幼年物語”の5つのタイプとして次の点をあげている。

- ①ぬいぐるみ派 生命を感じられない動物
- ②あこがれ派 ロマンチックなムード 「夢でした」とい終わり方
- ③涙派 不幸な境遇の主人公 悲しい結末
- ④作文派 子どもたちのある一日のスケッチ 図式的で実感なし
- ⑤アクション派 突飛な事件の連続 必然性なし 騒々しくて尻つぼみ

また経験の浅い幼年童話を読む年齢の子どもにとっては、物語はしっかりした骨組みの中で必然性をもって展開し、納得のいく結末であってほしい。

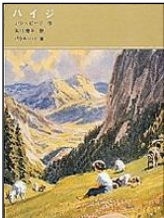
(記録・斉藤栄子)

【10月23日午後の部】

古典を読むワークショップ(ハイジ)

作者ヨハンナ・シュペーリは、1827年にチューリッヒ湖に近い山村で医師の父と詩人の母のもとに生まれた。25歳で弁護士のヨハン・ベルンハルト・シュペーリと結婚し、29歳で長男を出産している。1880年53歳で『ハイジの修業時代と旅の時代』を匿名で刊行し、翌1881年には『ハイジ 続編』を本名で刊行した。

日本での翻訳は、1920年の『ハイジ』（野上弥生子訳/家庭読物刊行会）で、1974年には『ハイジ』（矢川澄子訳/福音館書店）が刊行され、『アルプスの少女ハイジ』のTVアニメ放送も始まった。2003年には『ハイジ』（上田真而子訳/岩波少年文庫）も刊行された。



参加者は事前に原作を忠実に訳した完訳本の『ハイジ』を読んで参加し、印象に残ったことをグループで話し合った。また講師から作品の背景について説明があり、ダイジェストやアニメとの違いについて考えた。

本の印象としては、作者の人間洞察が深く人物の個性が具体的に描写されている、自然を愛する作者の気持ちが伝わる、神への信頼や宗教性を感じる、ハイジが周りの大人を救うところが素晴らしい、などがあ

がった。さらに、ハイジは知りたいという動機から学ぶことにつながった、大人にも読んでほしい、アニメとは違う、などの意見も出た。

講師から、ダイジェスト版では、人物描写が割愛・類型化されるので、「やさしいおじいさん」「元気な女の子」などのようにレッテル貼りされ、読者が自分で考えなくなることや、エピソードを削ることで話の脈絡がはっきりせず、つじつまが合わなくなることがある、との説明があった。TVアニメでは、子どもはいかにも子どもらしく純真に、登場人物も全員を悪者にしないように描かれている、とのことだった。



ハイジが書かれた時代背景として、スイスは平地が少なく産業が発達しにくいので、他国の傭兵となることが多かった、また、プロテスタントは自分の心の中で祈ることを重視する宗教であること、などの話を聞くと、ハイジのおじいさんのつらい過去や、クララのおばあさんの信仰心がより理解できた。

何より、ハイジの共感力が人を再生させる力となっていることは大きな魅力であり、大人が読んでも深い満足感が得られる。子どもは次々と起こる出来事や、食べ物や自然などのリアルな描写を楽しんで読むことができる。ぜひこの普遍的な物語を完訳本で楽しんでほしい。

(記録・渡辺みどり)

【11月13日午前の部】

ブックトーク(小学5、6年、中学生向き)

〈ブックトークの意義と目的〉

子どもたちに本の面白さを知ってもらい、本を読んでもらうため。本に対する興味を起こさせること。紹介した本から発展してそれ以外の本、読書全般への興味をかきたてること。

〈ブックトークのタイプ〉

タイプは2つ。①フォーマル(正式)一学校などで時間をもらって、45分で6~7冊を紹介する。②インフォーマルなもの一子どもに「何かお

もしろい本ない？」と聞かれたときや、おはなし会のあとで1~2冊簡単に紹介する。

〈自由なテーマ〉

テーマは自由。同じテーマで幅の広いジャンルの本を組み合わせる。例えば「どんな家に住んでみたい?」「たまご」「飛ぶ」など。

〈本を選び方〉

①自分が好きな本 ②良い本だがなかなか手に取られない本 ③バラエティー(絵本、図鑑、伝記など)に富んだ組み合わせ。

読める読書能力がそれぞれ違うので、いろんな子どもたちが手を伸ばしやすいようにする。

〈構成とテクニック〉

ブックトークをひとつのストーリーと考えて、起承転結をつくってお

く。また本と本をいろいろな切り口でつないで、絵を見せたり、一部朗読したりすると聞き手を飽きさせない。絵本など短い本はまるごと読み聞かせたり、科学本では実際に実験して見せたり、実物を見せるのも効果的である。

〈紹介の仕方〉

本の内容を正確に、嘘がないようきちんと紹介する。はじめの数ページが読みにくい本などは、「その部分はとばして読んでいい」など、読み方にも一言添えてあげると読みきっかけになる。あくまでも面白い本として紹介するのだから、本が面白くなかったら意味がない。

〈ブックトークするために〉

これらのことを踏まえて、ブックトークするためにまず自分の中に本のストックを持っておくことが必要である。7冊紹介するためには、40～50冊のあらゆるジャンルの本を読んでおきたい。その中から、つなぎのいいものやバラエティーに富んだ組み合わせを決めていく。本が決まったら順番を決めてシナリオを書いて実際に声に出してやってみる。

〈ブックトーク実践〉

子どもたちにブックトークしたら、子どもが自分で読んだり、借りたりできるように、紹介した本のリストを配布する。紹介した本はなるべ

く複本を図書館にそろえておけば、その場で子どもたちに貸し出しできる。ブックトークは1回作っておしまいではなく、別の本を足したり引いたりして、仲間同士で紹介したり、お互いの案を教えあったりして、さらにより良いものに仕上げていく。

日常的に本を読んでいない子、本に慣れていない子は図書館に行っても絵本をバラバラと見て適当に借りていくことが多い。そういう子たちには、ブックトークが本に興味を持ってもらうきっかけになる。

【講師のブックトークの実践】 テーマ「謎の言葉」

『ヘンリーくんと秘密クラブ』

『カッレくんの冒険』『地底旅行』

『ハヤ号セイ川をいく』『魔法のアイロン』

『グリーン・ノウの魔女』

『レオナルド・ダ・ヴィンチの素描』

『秘文字』『暗号通信』『人間と文字』

合言葉や暗号、呪文などに関連する本を、いろいろな切り口でブックトークをした。
(記録・鈴木志保)

【11月13日午後の部】

ミニブックトークに挑戦しよう！

グループワーク (A～F)

1. 課題の発表

事前に選んできた絵本を見せ合い、テーマ理由、キーワード、紹介方法を各自発表する。

2. ミニブックトークのプログラムの作成

グループで紹介する絵本を選び、対象年齢、キーワード、紹介方法を決め、起承転結を組み立ててプログラムを作成する。

3. ミニブックトークの実践

グループの代表者が実際にミニブックトークを行う。

※読み聞かせは省略

Aグループ テーマ：卵 対象1, 2年生

「卵のいろいろ」

①『チム・ラビットのぼうけん』から、なぜぞぞを出す ②『ぐりとぐら』読み聞かせ ③『たまご大図鑑』紹介(実物大のダチョウの卵の写真を見せる) ④『石の卵』紹介(サンダーエッグの写真を見せる) ⑤『おしゃべりなたまごやき』読み聞かせ ⑥『魔女のたまご』あらすじ紹介 ⑦『チム・ラビットのぼうけん』紹介

講評 なぜぞぞの答えを言わないまま『ぐりとぐら』の紹介に入るより、先に答えを教えた方がよい。『石の卵』は、卵ではなく石のテーマで紹介した方がよい。『チム・ラビットのぼうけん』や『おしゃべりなたまごやき』を持って来るなら、現実的な写真の本は出さない方がよい。

Bグループ テーマ：卵 対象3年生

「たまご！生まれる・できる・まもるもの なあに？」

①『あひるのジマイマのおはなし』を読み聞かせる ②『あれこれたまご』いろいろな卵料理を紹介 ③『たまごとひよこ』たまごからひよこになるまでの成長の様子を紹介 ④『たまごからうま』(ベンガル民話)あらすじ紹介

講評 紹介本を4冊だけに絞っていたのが良かった。『たまごからうま』は卵のテーマで紹介するには無理がある。「ものいうたまご」など、実際に卵が出てくるお話の本を出すのがよい。『たまごとひよこ』は今はなかなか借りられていないので、こういう機会に紹介するのはよい。



Cグループ テーマ：牛 対象1, 2年生

「せかいの牛となかよしになろう！」

①『うしさんぎゅうにゆうくださいな』読み聞かせ ②『にぐるまひいて』(アメリカ)あらすじ紹介 ③『くいしんぼうのはなこさん』(日本)読み聞かせ ④『はなのすきなうし』(スペイン)あらすじ紹介 ⑤『うんがにおちたうし』(オランダ)あらすじ紹介 ⑥『雌牛のブーコーラ』(アイスランド)紹介

講評 実際に飲んでいる牛乳はどこから来るのかというところから繋げていったのが良かった。『にぐるまひいて』『くいしんぼうのはなこさん』『はなのすきなうし』は、今はなかなか読んでもらえないので、これを機にぜひ手にとってもらいたい。

Dグループ テーマ：骨 対象4年生

「ほね・ほね・いろんなほねのおはなし」

①イギリスの昔話「ちいちゃい、ちいちゃい」語り ②『ほね』紹介 ③『ホネホネどうぶつえん』『ホネホネたんけんたい』『ホネホネすいぞくかん』イルカ・コウモリなどの標本の写真を見せる ④『スーホの白い馬』あらすじと馬頭琴の紹介 ⑤『ほね、ほね、きょうりゅうのほね』紹介 ⑥『バーナムの骨 — ティラノサウルスを発見した化石ハンターの物語』紹介(最後のページの一文を読む)

講評 写真絵本は数が多いとわからなくなるので、どれか一冊にした方がよい。『ほね、ほね、きょうりゅうのほね』から『バーナムの骨』への繋がりが良かった。馬頭琴のどの部分に馬の骨が使われているのかをきちんと把握しておく必要がある。子どもに質問されたときにすぐ答えられるようにしておかなくてははいけない。

Eグループ 『ほね』 テーマ：骨 対象2, 3年生

「骨・ほね・どんなホネ？」

自分の手首の骨を触ってもらう ①『ほね』読み聞かせながらいろいろな骨の説明をする ②『11 びきのねこ』大きな魚の骨の場面を見せる ③『食べて始まる食卓のホネ探検』紹介 サンマの骨と『ほね』の魚の

骨を並べて比較 ④『ほね、ほね、きょうりゅうのほね』紹介 ⑤『恐竜のけんきゅう』紹介 ⑥『せいめいのれきし』紹介 ⑦『スーホの白い馬』馬頭琴の紹介

講評 途中からテーマが骨から恐竜になっていった。恐竜の本を減らしても良かったのではないかと、『ほね』と『食べて始まる食卓のホネ探検』の魚の骨の絵を2冊並べて見せてくれてわかりやすかった。馬頭琴についてはDグループと同じ。現在の馬頭琴は骨は使われていない。

Fグループ テーマ：川 対象1, 2年生 「川のはじまりと終りには何がある？」

①『かわ』読み聞かせ ②『黒部の谷の小さな山小屋』川の写真を見せる ③『たいくとおにろく』読み聞かせ ④『まあちゃんのながいかみ』川で髪の毛を洗う場面を見せる ⑤『コブタと大こうずい』あらすじ紹介 ⑥『川はながれる』紹介 ⑦『はまべにはいしかいっぱい』紹介

講評 冊数が多かった。『まあちゃんのながいかみ』『コブタと大こうずい』は川のテーマから外れている。『黒部の谷の小さな山小屋』はいい写真だが、川ではなく山小屋がメイン。自然の川か、人の暮らしに関わる川か、昔話の川か、テーマを絞った方がわかりやすい。

まとめ ミニブックトークでは、盛沢山にし過ぎないことが大切。全部を理解させようとする大変になる。あちこちに話が飛ばないように少し絞って出していくのが良い。写真絵本など現実のものと、昔話やファンタジーのものをどうやって繋げるか、無理矢理組み合わせていないかを考えること。写真はインパクトがあるが、細かい絵の方がわかりやすい時もある。紹介しなかった絵本も別のテーマで使えることがあるので無駄にしない。「ちいさなかがくのとも」「かがくのとも」シリーズは古くても使えるものが多く、『絵本の庭へ』は件名で探せるので便利。ミニブックトークを考えることは、本を広く深く詳しく見る勉強になる。
(記録・喜久川真弓)

受講生の感想から

- ブックトークのワークショップも楽しかったし、『ハイジ』は背景がよくわかってよかった。
- 実践的なものが多く、能動的に学びました。
- 『ハイジ』は図書館で借りて読みましたが、感動のあまり上・下巻共にそろえて購入しました。
- 具体的ブックトークを聞くことができてよかったです。
- 「ブックトーク」はあまり自分ではしたことがなかったので、今回よくわかってよかった。また先生の「ブックトーク」はすばらしくてたのしかった。
- 先生の具体的なブックトークの例示、読んでみたくなる気持ちになりました。グループで本を持ち寄ってミニブックトークの内容をいろいろ検討したことも、自分たちで考え作り出す活動が勉強になりました。
- 幼い子への読み聞かせから古典の本を読み込んだりミニ

ブックトークの経験と、幅広く勉強させていただきました。もっと幅広く本を読んで、勉強していきたいと思えます。

- ブックトークについて後まわしにせず、しっかり向き合う時間がとれた。
- 伊藤先生の活動やたくさんの読書歴から深い考察を学ぶことができ、よかったです。ブックトーク論や実践も勉強になりました。
- ブックトークが、奥が深くとても難しいというのがよくわかりました。練習が必要です。みなさんとチームで話をききながらできて楽しい講座でした。
- とにかく自分が本をたくさん読んで引出しをもつことだと改めて思いました。「この本おもしろいよ」という気持ちを持って紹介できるようにしたいです。
- ワークショップで、みんなで考えることができて、楽しく深められた。古典の背景など視点を教えられた。
- ミニブックトークの具体的なやり方を教わり、読み聞かせの際にも使えるようになりたいです。

11月5日朝霧カーニバルで 絵本の読み聞かせ



静岡県立朝霧野外活動センターで、11月5日(日)10:00~15:00、「静岡子ども体験フェスティバル朝霧カーニバル」が行われました。地域で青少年活動を提供している団体が協力して、今回もたくさんの野外体験のブースが用意されました。

市民読書サポーターは「おはなしと絵本の読み聞かせ」を、午前2コマ午後2コマの4コマを行いました。小さな子は3才から小学校5年生くらいまでの延べ50人ほどの参加者が、昔話の語りや絵本を楽しみました。

おすすめの絵本の展示も行い、親子で手に取って楽しむ姿も見られました。

